

## 銭湯ペンキ絵師

## つれづれ日記

## 第18回

田中みずき (銭湯ペンキ絵師)

## 特別な依頼

本連載の前号では、「女性」と特別に意識されながら制作を続けることへの違和感を書きました。しかし、まれに「女性だから依頼した」と言われてお受けする仕事もあります。

例えば、女性専用の宿の浴室に絵を描いてほしいというご依頼がありました。若い女将さんがいる宿泊施設で、女性による、女性のための宿という意識が感じられる宿でした。こういった場合、描く絵はいくつかのイメージ図を制作して依頼主にお選びいただくというプロセスで決めていきます。宿のプランディングと、女性客が好むものと、自分が思う女性らしさには違いがあるかも知れません。そこで、イメージ図をお選びいただく中で客観性を確立していきます。

## 「女性だから」という条件の前に

どのようなモチーフをご希望かと打合せをして、宿の雰囲気やロゴなどに使われるイメージカラーなどを確認します。そして、ご提案していくものを下記の三つの種類に分けていきます。

まず、完璧に打合せ時のご要望に沿った絵のイメージ図の制作。次に、敢えてご要望からかけ離れたスタンダードな銭湯のペンキ絵らしいもの。最後に、打合せの中で自分が受けたイメージに合わせて制作した絵にします。今まで、この三種を用意することで、自分にどんな絵が求められているのか確認をしてきました。

実は、絵を描く仕事をしていると「好きなものを描いて仕事になって良いね」と言われることがあります。けれども、お仕事で受ける絵は趣味で描いているわけではありません。打合せ時に頂いたご要望の中で、自分であればこういった表現をするという選択をし、その選択をさらにお選びいただくことで生みだされていきます。これは、例え女性として受けた依頼であっても男女関係なく求められるものでしょう。自分のために描いた絵を公開することは、恐らく自分には無いように思えます。

## 花の絵が描かれる時

また、「風景と一緒に花を描いてほしく、女性に頼も



うと思った」といったお話もよくいただきます。美術史の中では、女性よりも多くの男性の画家が花の絵を描いてきた歴史があるため、最初は驚きました。そして、世の中には「女性は花が好き」というイメージがあることに気付かされるのです。女性らしさとはこういうものだと言われたような気持ちになります。問題は、私が「花より団子」という性格だということでしょう。

しかし、植物は観ていくと造形も色も本当に面白く、絵にすると映えることはわかっています(花をいただくと、面白さに惹きつけられて眺めてしまいます。恐らくこれは男女ともに変わらないのではと思っています)。長い歴史の中では、女性が「画家」として生きていくことが叶わず、花を描く仕事すら得られなかったことを考えると、お受けしないという選択肢はあり得ません。

こうなると、世の中の女性らしさへの固定観念は自分にとってどのようなものなのか、自分自身に問いかけることとなります。こういった仕事を自分が受けることを自分自身で納得できるのか、そして、それがどのように受け止められるのだろうかを改めて考え直すという経験を続けてきました。

様々なご依頼は自分の中で問いを生み出すきっかけとなり、考え続けていく大きな助けになっていきます。自分に何が求められ、何をすべきかを模索していく頼りになるのです。歴史の流れの中で、自分は現状をどのように把握し生きていくのか、女性であることを踏まえて再考していく時期にきているのかも知れません。

そんな風に考えながらも、通常では女性であるということなど考えずに現場に向かい、ペンキで汚れた作業着でひたすら制作をしていく毎日です。そういわれる現場が、ただ有難いのです。

プロフィール ● 1983年大阪生まれ。幼少時から東京在住。筑波大学付属高等学校進学後、明治学院大学在学中に銭湯ペンキ絵師・中島盛夫氏に弟子入り。現在は独立し、銭湯のペンキ絵のほか、老人ホームの浴室や店舗など制作の場を広げている。現代美術展覧会・レビュー情報サイト「カロンズネット」元編集長。ペンキ絵制作に関する活動は、ブログ「銭湯ペンキ絵師見習い日記」(<http://mizu111.blog40.fc2.com/>)にて随時掲載。